

和紙

だより

越前和紙への提言



■ 横山祐子

有限会社縄文社代表。シンポジウム、研修旅行、展覧会、講演会、本作り企画などを通して、日本の伝統工芸を国内外に紹介し応援する仕事に永年携わっている。伝統工芸に精通する学芸員のような丁寧な解説や情報作りには定評がある。近年、職人を巻き込んでの海外草の根手仕事文化交流に力を入れている他、現代生活にもオシャレに活かすことのできる「日本のてしごと」作品をネットで紹介販売中。

<http://www.handmadejapan.com>

■ 横山祐子さん（伝統工芸プロデューサー）
「世界のハイセンスな人々に向けて」

● 日本を雄弁に語るものたち

私は七十年代から仕事の関係でニューヨークに住み、日本と行ったり来たりしていたのですが、渡米して初めて日本文化をよく知らない事に気付いたのです。帰国後、伝産協会の当時の兼崎専務理事の音頭で「伝統的工芸品国際化研究会」を有志で立ち上げました。八十年代後半当時は、伝統産業も国際化ということが叫ばれ、私はその事務局として、企画運営に関わるようになりました。

その時のひとつのプロジェクトに「土佐和紙」があり、文化財修復研究の方、流通の方、外国人や老舗の方などに参加していただき、財団から助成金を受けてシンポジウムを企画しました。このような経験から、物を通して文化を理解してもらうのが分かりやすいと感じたのです。物は抽象でないから説明しやすい。外国人に工芸品を見せて、こういう物を美しいと思う国民なんです。例えば、漆というのは樹液で、漆の伝統工芸品はこのような歴史を持ち……という具合に、物を通して日本を語る事ができるのです。

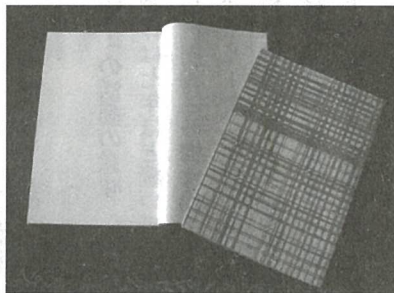
● 伝統産業の本作りの仕事

本作りのきっかけとなったのは、ダイヤモンド社の六十周年記念の出版企画でした。日本の伝統工芸品を収録した日本語八巻、英語八巻、ビデオ四巻から成るもので、トヨタ自動車などの日本企業が買い取って下さり、海外の図書館や学校に寄付して下さいました。その英語の翻訳を引き受けたのですが、専門知識

を必要とする翻訳のため、各分野を研究している海外の学者を捜し出し、コンタクトを取り、十数人の翻訳チームを組んで作業しました。今のようにメールもない時代ですから大変で、二年ほどかかりました。けれども、そのセット本は普通の日本人の手に入る物ではないので余りにももつたいたいと思ひ、外国人へのお土産に使って頂けるような四〜五千円の本を作りたいと考え、出版社に写真を使わせて頂けないかと交渉しました。そうしてできたのが伝統的工芸品英文紹介書『Japanese Crafts』（講談社インターナショナル刊）です。



着物の型染作家岡村美和さん（九州）
のお祝いとおくやみ袋



府川次男さんに習った和綴り本

● 草の根手仕事交流

日本人も伝統工芸品について知らない時代になってきました。新宿のリビングセンター OZONE は立ち上げから関わっています。OZONE では、素材別（木工、指物、和紙、漆……）やテーマを設定した展覧会の企画を手掛けました。そのうちに何だか「伝統工芸おぼさん」みたいになってしまつて……（笑）。

インターネットでの販売は、私の好きな工芸家を選んで紹介し、ゆつくり販売しています。

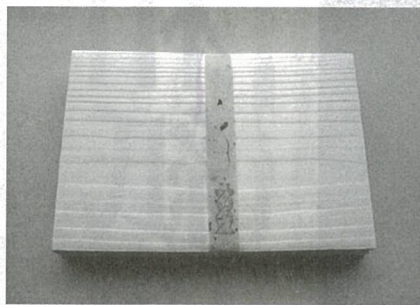


イギリスにて、参加者に時代筆筒
の説明をする木戸良平氏

handmadejapan.com は一日に五〇万ヒット（平均六〇〇人、日本人が七十％）あります。ここ数年連続している、職人さんの海外での講演やワークショップ、展覧会を開く仕事は、本当に草の根の手仕事交流という感じなのですが、作品を販売しようとか、日本文化を宣伝しようというよりは、職人さんに何か感じてもらえればいいと思つています。私は職人さんを応援したいので、二週間くらい自分の職場から離れて、異国での様々な生活スタイルを見たり、手仕事の成り立ちも違う所があるのだと感じてもらうことも、時には必要だと思つているのです。つい最近、時代筆筒の職人さんに、イギリスのヘイ・オン・ワイという所に行つて頂きました。

●世界のハイクラス層を狙う

越前の和紙は、高級品で通っていますが、高級品は下へ向かって広げようとしても難しい。市場スケールを広げようと思うと、どうしても単価競争になりますから、安い物、質の低い物に流れていく競争になってしまうのです。購買層のピラミッドで、収入があり審美眼を持つている層は、日本では限られるかもしれませんが、世界を射程に入れればけっこう大きな層になります。世界のハイクラスな人たちは文化的にも開かれているし、海外旅行の経験も多く、知識も豊富です。こういうところには日本の工芸はまだ上手にアプローチできていない。海外に、全国の和紙見本があり、情報も得ることができ、販売もできるような和紙ショールームがあれば、次第にこのマーケットを広げることができるかもしれません。和紙で版画やシルクスクリーンを刷る人も多いです。



土佐の大勝敬文さんの板日紙のステーショナリー

■「紙綴り」紙に関わる女性の交流と表現の場 上埜暁子さん



上埜暁子さん（自身の作品を前に）

●女性職人の思いを紙に託して

紙漉ぎの仕事には昔から女性が多い。全国に散在する手漉ぎ和紙に携わる女性のネットワーク、「紙綴り」というグループがある。「全国手漉ぎ和紙青年の集い」で出会い、意気投合した二人の女性紙漉ぎ職人の文通から始まった。しばらくは二人の間で意見や想いを交換していたが、他にも考えを持つ女性紙漉ぎ職人との交流を持ちたいと冊子を制作することを考え、平成十年に創刊準備号を制作した。「青年の集い」で出会った紙漉ぎ職人を中心にネットワークを広げ、次第に参加者が増えていった。活動は半年に一度、各自が漉いた和紙に自分の近況や半年間に考えた事、悩んでいる事などを書き綴る。思いを書き込んだ紙は人数分制作され、持ち回りの担当者が綴じて執筆者に送られる。

漉ぎ場の従業員として仕事はできるが、なかなか自分の漉ぎ場を持つて思い通りに制作できる環境を作ることは難しい。たまたま結婚した相手が、漉ぎ場の跡取りで、意図せずに紙漉ぎの仕事に就く女性も少なくない。「紙綴り」の冊子は、このような状況で働く女性の悩みや意見、想いを交換するメディアとして存在している貴重な媒体なのだ。現在の参加メンバーは、紙漉ぎの工房を持っている人だけではなく、漉ぎ簀を制作している人、漉ぎ場従業員として働く人などで、地域も様々である。

●「紙綴り」の活動の意味

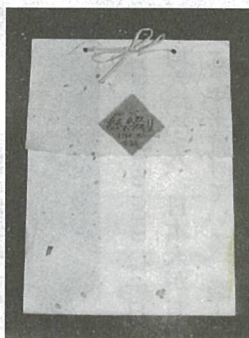
冊子の制作は七年ほど続いているが、四年前から東京世田谷区の梅ヶ丘アートセンターというギャラリーで、年に一度、メンバーが制作した和紙作品の展覧会「紙綴り展」を開催するようになった。「紙綴り」の展示会場にて、メンバーの一人である上埜暁子さんにお話を伺った。

上埜さんは現在、長野県の木島平村で内山和紙を守る「内山手すき和紙体験の家」の運営を任せられ、紙漉ぎ体験の指導を行う傍ら、オリジナル和紙も制作している。東京の美大を出てグラフィックデザイナーとして働いていたが、たまたま、徳島の製紙所が開催するワークショップに参加し、和紙の虜になる。その製紙所に頼み込んで入社し、以来、和紙に関わることとなった。

その後独立の準備をしていた所、「内山手すき和紙体験の家」の運営をしないかという話が持ち込まれ、内山和紙の里へ単身入り込んで施設の管理運営をはじめた。内山和紙は、江

戸時代初期に飯山辺りに製造技術が伝わったと言われ、楮の漂白に薬品を使わず雪を使って晒すのが特徴だ。豪雪地帯の雪の中で晒す作業により、丈夫で風雪に耐えうる紙が出来上がるといわれている。

木島平村の「内山手すき和紙体験の家」は途絶えてしまったこの紙漉ぎの文化を守ろうと自治体が設置したもので、その後地元有志が出資して運営している。上埜さんは、紙漉ぎ以外にも施設の運営コストの削減、売り上げ向上への工夫などお金の心配をすることが多



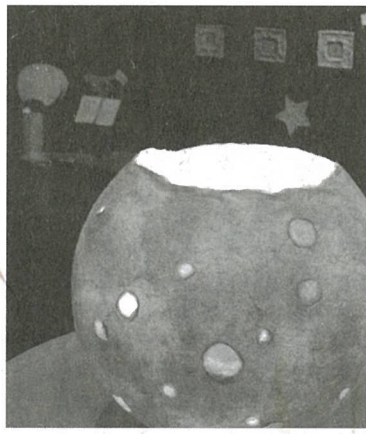
創刊準備号（上）とその後発行された「紙綴り」各号（左）



かった。紙漉ぎが途絶えた産地に一人でやって来て、周りに同じ紙漉ぎ職人として相談できる人もおらず、孤独な毎日だったという。そんな中、平成十三年に新潟で開催された「全国手漉ぎ和紙青年の集い」に参加し、そこで「紙綴り」の活動を初めて知った。

「それまで、施設の経営などお金の事ばかりを考えていましたが、この様なお金がからま

ない活動がなにより新鮮でした。『紙綴り』の活動には、冊子が欲しいのでずっと参加しています。この冊子には、世の中で売っているような情報誌などにはない、紙を作る女性だけの物語があります。いまだきわさわざ紙を漉こうという女性は、自分からこの世界に入った人もそうでない人も、何か自分で考える所があつて紙を漉いています。そういう考えを持つている人は面白く、自分の励みにもなります。紙に書いて文章にするという行為を通じて、単に会っておしゃべりするよりも密度の高いやり取りができていくのだと思います。」と上埜さんは語る。



ボール型に和紙を成型した照明器具

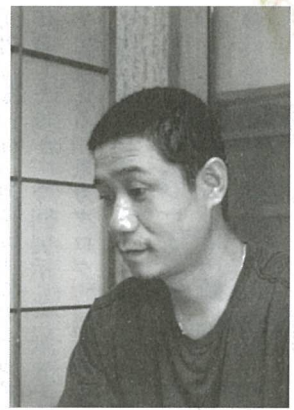
二〇〇六年六月に開催された展示会「紙綴り展 2006」は、和紙の可能性を深め、広げる試みを「和紙の可能性」展と題し、照明器具、和紙の洋服、カード、等が展示された。二〇〇七年は「紙綴り展」ではなく、十一月九日、手漉き和紙によるカレンダー展を梅ヶ丘アートセンターにて企画している。

紙綴り事務局

代表人 後藤敦子

電話 03-33956-1639

■越前和紙青年部会
リーダー木村佳英さん
「カレンダー作りを通して」



リーダーの木村佳英さん

越前和紙青年部会の活動は、四十年前から始まった。お話を伺った木村さんのお父さんが初代会長だったそうだ。木村さんの家では、お兄さんも会長経験者で親子三人が会長になったことになる。

●カレンダー作り

この会の年間活動の軸をなしているのが、楮を村の畑で一年かけて育て、加工し、漉いて、カレンダーを作ることだ。原料の育て方から学んでもらい、和紙生産のいろはを伝授する。春、植えた楮は夏近くになると雑草取りや「芽欠き」と呼ばれる剪定作業が欠かせない。多い時には、月に三回は集まって畑で作業を行う。例年十二月頃、落葉が済んだ楮を収穫し、釜で蒸し、皮をむき、干し、原料にして漉く。毎年作るカレンダーの柄やデザインは、みんなで相談して決める。シルク印刷も仲間の工房で刷り上げる。できあがったカレンダーは、取引のある客や問屋さんなどに配る他、希望者には販売もする。

●新しい挑戦

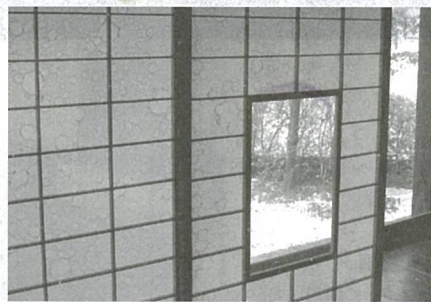
カレンダーをみんなで制作するという若い後

継者同士の親睦活動から、一歩踏み込んだ活動が始まった。新しい障子紙を提案してみようという挑戦が五年前から始まっている。「越前」といえば、現在では襖紙を思い浮かべる人が多いと思うのですが、障子は日本の文化ですし、光の当て方で表情も変わります。洋風の家にも使ってもらえるような障子を提案すれば、越前でも障子の需要が増えるのではないかと話し合いました」と木村さん。制作した紙は、越前の技法を活かした落水、白と緑の漉き合わせ格子柄やマープル模様のもので、どうせ作ったのなら、やはり販売までしなくてはいけないのではと、話も広がりカATALOG作り、ゴールデンウィーク中のイベントでは展示を行った。評判はよく、見に来た幾人かのお客さんが買ってくれた。今後もこの分野は続けていくつもりだ。



青年部会で制作したカレンダー

メンバーは二十五歳から三十代の製紙業者の後継者が多い。他の産地の漉き屋の数が随分減っていることを思えば、家業を継げるだけまだいいのかなあとと思うそうだ。「メンバーは余り将来に対して悲観してはいないんです。自然体で前向きに何かしていれば、そのうち道が開けてくるかなあ、というぐらいの意識なのです」と木村さんは負気負っていない。若い人の力やアイデアを活かし、産地の活性化に役立てようというこの活動も平成十九年三月で四十周年を迎える。今年は大きな記念式典を青年部で企画運営しなければいけないので、目下準備に追われている。記念冊子や記念品も用意する予定だ。



提案した障子紙と色柄サンプル

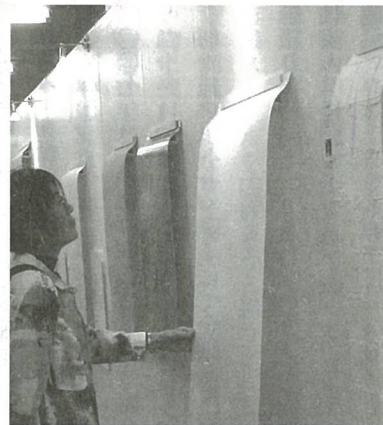


イベントレポート

■「素の紙展」2006 東京展開催

福井県越前市の魅力を伝える交流イベント「東京えちぜん物語」が、十月十一日〜十四日、東京港区エコプラザで開催され、この会場の一角で、越前和紙の魅力に触れて頂く「素の紙展」2006が開催されました。

和紙は、照明や襖の他にも、壁や天井に内装材として利用することができ、やわらかな手触り、あたたかい風合い、光や風を通す呼吸する和紙は、ともすると冷たくなる現代建築の表情を和らげ、モダンな建築やインテリアに日本人の感性に馴染む和のテイストを添えることができます。また近年、室内の湿度調節や汚染物質の吸着などの和紙の機能性や、



会場の展示風景

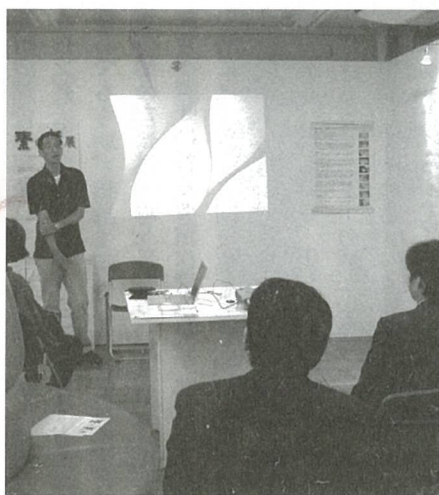
リサイクル可能なエコな素材であることに注目が集まっています。

今回の展示は和紙をインテリアに使っていただくために、「壁紙などに利用できるベシックな和紙」「照明器具やスクリーンに利用できるアクセントになる和紙」をコーディネートし、二十点余りの作品を厳選して展示しました。ベシックな和紙では、空間になじむ淡い色を基調とした雲肌麻紙、雲竜紙、大札紙など、アクセントになる和紙では、水切り技法で漉いた落水や檀紙、光のこぼれ具合が美しい大判の紙など、多彩な和紙に足を止めて質問する方もいました。

又、十三日には、同会場にて「インテリアに和紙を使う」と題してミニセミナーを開催。経師職人の浜中淑光さんによる和紙インテリアの魅力、壁に貼るためのノウハウや壁紙に使うことのできる和紙のお話を、スライドを交えながら講演して頂きました。

講演では、特に和紙壁の魅力を最大限に引き出す昔から行われている袋張りの技法、最近の建築素材との相性、事例として、建築家とコラボレートした「ただの白い壁」プロジェクトの紹介、和紙張りに使う道具、経師職人

からみた越前和紙の魅力について語って頂き、多彩な内容となりました。その後、参加者へ交えて、実際に和紙を壁に見立てた板ボードに貼って、ノリの付け方や張り方、紙の重ね方などを学びました。



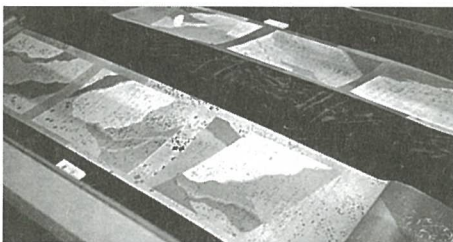
ミニセミナーの様子と袋貼りを実演する浜中氏

なお、和紙組合では住宅に和紙を使うためのリーフレット「インテリアに和紙を使う」を用意したほか、今回展示した紙を「インテリアに使える和紙カタログ」に収録し、配布しご好評を頂いています。

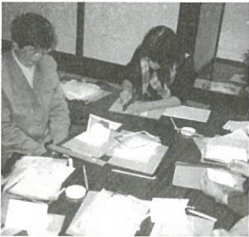


会場で配布したパンフレットやカタログなど

■第十九回「源氏物語アカデミー」開催される今年で十九回を迎える「源氏物語アカデミー」関連イベントが、十月二十七日～二十九日、越前市の各所で開催された。このアカデミーは、紫式部が九九六年、越前国国守の任で青春時代の一年間を武生で過ごした史実に基づき、源氏物語を題材とした町おこしを目的として設立されたもの。



並ぶ美しい紙の「王朝継ぎ紙」展と料紙作りのワークショップの模様



今回のテーマは「源氏物語と紙」で、和紙産地にも興味深い内容となった。今立生涯学習センターでは、十月二十八日、染織家吉岡幸雄氏による「装飾された王朝の紙と色」、作家近藤富枝氏の「華麗なる王朝の紙遣い」と題する講演が行われ、平安時代の豊かな文学状況と和紙との関係が語られた。

又、今立の卯立の工芸館では、関連展示「平安の雅を伝える王朝継ぎ紙」展が開催され、源氏物語ファンならずとも美しい紙を鑑賞することができた。工芸館では、簡単な王朝継ぎ紙を制作してみるワークショップも開催され、参加者達は思い思いの和紙で雅な料紙作りに挑戦した。

情報欄

● イベント情報

■ 越前和紙展

時：平成18年12月8日(金)～平成19年1月7日(日)
場所：福井市「ふくい工芸舎」

■ 越前・若狭の物産と観光展

時：平成19年1月25日(木)～30日(火)
場所：新宿「京王百貨店」

■ 伝統工芸展 WAZA2007

時：平成19年2月15日(木)～20日(火)
場所：池袋「東武百貨店」

編集後記

「素の紙展」2006で講演をお願いした浜中さんは、和紙を住宅にしつらえる時、お施主さんにも作業を手伝ってもらうワークショップ形式を採用しているそうです。和紙の内装材も施工過程を体験すれば、道理もわかり、実に心地よいのだということを知って頂けるのではないのでしょうか。(よ)